こうなったら「鈴木光司展」をやろうということになって、武村先生と神谷先生が企画して、あれは10年近く前だったと思うんですけれども、浜松文芸館で「鈴木光司展」を半年間やりました。そのために僕は自分の展示できるものいろいろ東京から運んで、展示物を用意しました。中には、浜松文芸館にリングの小部屋というのを作って、そこに入るといろんな映像が、映画の映像とかが流れてくるような仕掛けを作りました。

さてそのような浜松文芸館で、「鈴木光司展」を開くとなったそのオープニングセレモニーの日、お客さんが100人くらいきて、その前で僕がスピーチしました。そして、小学校の5年、6年のときの担任の神谷先生、武村先生も壇上に座っておられました。僕が今いったようなことをスピーチしたんですね。「僕が小説家としてここにあるのは、小学校の5年、6年のときに、小説を書くきっかけを与えてくださった神谷先生のおかげです。神谷先生は僕が書いた、初めて書いた小説をみんなの前で朗読して、この子は作家の才能があるかもしれないと褒めてくれました」というようなことを僕がしゃべりました。そしたら次に神谷先生のスピーチになりました。そしたら「鈴木光司君は、先程このように言ったけども、まったく記憶にございません」と言うんです。さらに、「鈴木光司君が小説を書いてきたことも忘れているし、知らないし、自分が朗読したことも覚えていない。しかし、私のその当時の教育方針は、絵の下手な子にはうまいと褒める、歌が下手な子には歌がうまいと褒めるという教育方針でやっていたから、たぶんそのパターンだったと思うよ」みたいなこと言ったんですね。僕は横で聞いていて愕然としました。まぁ、会場は大爆笑でしたが、まぁ僕は神谷先生のユーモアだと思いたいところです。

いずれにしても、僕はそういった大人たち、僕が子どもの頃に出会った大人たちから、いろんな言葉をかけられて、それが自分に勇気を与えてくれた。やる気を起こさせてくれた。豚もおだてりゃ木に登るというわけで、なんかできそうな感じになってくるんですね。僕は、小学校5年、6年のときからものを書く、小説を書く、空想の物語を書くということの喜びを知ったわけです。

で、将来の目標を決めました。一つは太平洋を横断するという夢を抱き、もう一つはいずれものを書く仕事を自分の天職にしようというようなことも考え始めたのも小学校の5年、6年のときでした。そしてもう一つ、小学校5年、6年の時、僕のクラスに女の子が一人転校してきました。僕はその女の子がみんなの前で自己紹介をして頭を下げて上げたときの顔を見たとき、ものすごいインプレッションが来ました。将来の自分の妻がここにいると、そのとき思いました。僕にとっての初恋、一目ぼれでした。将来やらなくちゃいけないことが、これで3つに増えました。僕の初恋の女性を自分の妻にすることが加わり、この3つのターゲットにロックオンしたのが広沢小学校の5年、6年のときですね。

僕にとっての初恋は、片想いでした。僕はラブレターとか書いたりしたんですけど、つれない返事がきて、全然相手にしてくれませんでした。その後、僕たちは広沢小学校を卒業して、蜆塚中学に進学しました。初恋の女性も鈴木康友も同じ蜆塚中学で、一緒に学びました。蜆塚中学にいってからも、僕は初恋の女性にラブレターを書いては、鈴木康友に託しました。ところが、鈴木康友はラブレターを彼女に渡さずに、封を勝手に開いて読んで笑っていました。それが今の浜松市長です。まぁそれで僕たちは中学を卒業して、僕と康友は浜松北高に進みました。僕の初恋の彼女は西高に進みました。高校卒業して、僕はどうしても作家になりたいという夢を抱いて、東京の大学に進みました。初恋の彼女のほうは、親が先生をやってたもんですから、千葉大学教育学部に進みました。東京と千葉ですけれども、まぁ近いです。相変わらず僕はラブレターを書いたりしてましたけど、つれない返事。僕は大学の文学部、フランス文学科で文学の勉強を積みながら、いつか作家としてデビューしてやるぞって考えてました。完璧な作家志望だったものでしたから、大学を卒業して就職するという道を選ばなかったんですね。大学生の頃から塾の先生と家庭教師をやって、ある程度の現金収入を得ることができた。これで暮らせるというような目処が立ってたんですね。だからあえて就職をしないで、塾の先生、家庭教師、それからいろんなアルバイトをやってました。アルバイトをして生活の収入を得ながら、自分の自由になる時間を確保して、そして作家修行をして、必ず小説家になってやると思ってました。

ちょうど僕が大学を卒業して、就職をせずにフリーターの道に踏み出したころ、彼女の方は大学院を出て、高校の歴史の先生に就いていました。しかし、僕が小学校5年のときのインスピレーション、この人が将来の自分の妻だというインスピレーションを絶対実現させるためには、へこたれてはダメだ。当時、僕は非常にやばい立場でした。僕自身はアルバイトをやりながら作家修行をしている、作家志望のフリーターです。彼女のほうは大学院まで出て学校の先生という立派な仕事についている。おまけに大学院のときの先輩のフィアンセがいるという状況。しかも担任の教授が仲人をやってくれる、そこまで話がいってたんですね。僕としては、ものすごく弱い立場です。ところが僕の場合、これまでの生き方はどういう感じかっていったら、ターゲットをロックオンしたら、あとはファイヤーって感じです。必ずこれを実現させてやるっていう方向に向かっていくんですね。あれは今でも覚えています。昭和59年、1月15日に決戦を開始しました。それまでずっと僕の片想いだった彼女に対して猛烈なアプローチをかけて、僕と結婚してほしいという思いを伝えました。1月15日に決戦を開始して翌月の2月13日、バレンタインデーの1日前にようやく陥落させて、僕との結婚を承諾させました。そして、そんなわけで僕は結婚することになったんですね。

結婚して、2年後に長女が誕生しました。相変わらず僕の方はといえば塾の先生やったり家庭教師やったり、それ以外にいろんなアルバイトをやりながら小説を書き、作家修行している状況。妻のほうはフルタイムで働く学校の先生です。その中で長女が生まれてきた。さて、どちらが子育てをやらなきゃいけないとなったときに、これはしょうがねぇな、俺がやるしかないじゃないかと思ってはじめたのが僕にとっての子育て。いま長女24歳になりますけれども、24年前こういった子育てをテーマにしたシンポジウムとか、まだまだありませんでした。そんな中で、僕には男性が子育てに積極的に関わるべしというような意図があったわけではありません。そういった意識なんてまったくありませんね。面倒くせぇなぁと思ってはじめたのが僕の子育てなんです。

それと、僕にはその頃小説家になるという目的が、仕事上の大目標があった。ところがここで子育てを始めてしまったらどうなるんだ。それまでまったくやったことがないんだけれども、子育てには多分膨大な時間が割かれてしまうだろう。時間もエネルギーも子育てに割かれてしまうだろう。そうすると僕の作家になりたいという夢は、ここで淡くも消えてしまうかもしれないという不安も相当抱きました。しかし、状況としては僕の方が主に子育てを担当せざるを得ない。しょうがない、やってみようかと思ってはじめたところが、これがまたびっくり。

やってみるまでまったく気づかなかったんですけど、思いもよらなかった。なんと、この生まれたばかりの子どもの世話を僕が一気に引き受けたことによって、僕の小説が格段にレベルアップしていったんですね。僕の夢を邪魔したり、すっと遠ざけるのが子育てと思っていたら、逆に僕の夢をぐっと引き付けてくれた。なぜかというと、やっぱ0歳の赤ちゃんを育てるというのは、ものすごく忍耐力が必要だし、理不尽なもんです。夜中であってもワーワー泣いたりします。ところかまわずおしっこしたり、ウンチしたりするわけですよ。僕はもう言葉もしゃべれない0歳の赤ちゃんの心を想像したりとか、非常に想像力が磨かれます。

それから忍耐力も身につきます。その頃僕らが住んでた部屋は、35平米の1DKです。ここに親子3人。その後に娘がもう一人生まれて、結局親子4人で35平米の1DKに、10年以上暮らしました。そうすると、親子川の字になって、4畳半くらいの部屋に寝てるとですね、夜中に急に赤ちゃんが泣いたりする。妻は朝7時には学校に行きますから、妻が起きちゃったら体力的にもきつくなる。妻が起きる前に僕がぱっと赤ちゃんを抱き上げて部屋から出て、赤ちゃんをこうやってゆすってですね、また泣き止ませて寝かしつけてから、布団に戻すということをやっていたんですね。そうすると、またその赤ちゃんの視点からいろんなことが見えるようになってきたんです。僕は大学時代から小説書いていましたけれども、ろくなものが書けなかった。というかまず書き上げることが一切できなかった。小説を書いては捨て、書いては捨ての連続で、一編たりとも完成できていなかった。ところが子どもの世話をはじめてから、小説が完成できるようになってきたんですね。最初のうち短いもので10枚とか20枚、それが40枚50枚、100枚とか200枚に増えていった。これはいい。必ずこの調子でいったらプロの作家へのハードルを越えることができるなと思って、ターゲットをまたぐっと絞り込んだ。そして平成2年、僕は『楽園』という小説で作家デビューを果たすことができました。

そして作家デビューと同時に二人目の娘が生まれてきたんですね。僕がプロの作家になってからもさらに子どもは一人増えて二人になって、僕の小説家という仕事と子育てという仕事、家庭内の育児を二つ同時にやる、まぁ兼業主夫作家というようなことをいわれるようになってきたわけですね。その当時の僕の典型的な一日はざっとこんな感じです。朝の7時になるとうちの妻は、「いってきます」と言って学校に出かけていきます。それから7時から9時の間は子どもたちにご飯を与えたりしながら保育園に行く支度を整える。僕は保育園に娘たち二人を預けてたんですけれども、朝の9時から夕方の5時半まで。その間が僕の仕事時間です。子どもたちが家に戻ってきたら、僕は一切仕事しませんでした。気が散って小説に集中することができなかったからですね。朝の9時になるとですね、娘たちを連れて、あるときは自転車の前と後ろ、あるときは片一方を抱っこして、片一方をベビーカーにという感じで保育園に連れて行きます。保母さんに預けて、ようやく自分の仕事時間がスタートします。いくら筆が乗るといっても、だいたい午後の2時半くらいからがメインの小説の執筆に入っていくんですけれども、お尻はきっちりと決まってます。5時20分くらいになったら、その日に書いたものをプリントアウトして、データを保存して、ワープロの蓋を閉めて今日の仕事はこれでおしまい。さぁ、保育園に迎えにいくぞと、保育園に出かけていきます。

その出かけていくときの格好というのは、だいたい短パンとTシャツです。1枚500円しないくらいの、非常にみすぼらしい短パンとTシャツです。だいたいこんな格好で夕方の5時半ちょっと前くらいの時間を東京のど真ん中、街中歩いているとみんな結構振り返っていきます。この人こんな格好して、季節外れの短パンとTシャツ姿で一体何やってんだろうというような好奇な視線を受けたりします。保育園について、娘たちが、「パパ、パパ」といいながら僕に飛びついてくるんですけれども、その娘たちが僕に輪をかけて、みすぼらしい格好しています。どのくらいみすぼらしい格好しているかといいますと、僕はこの仕事と子育てを両立しているときにですね、どうやっても手が足りないとき、仕事が忙しくて手が足りないときは、浜松にいる僕の母親に手伝いに来て頂戴と呼んでいました。で、あるときうちの母がですね、浜松から東京に駆けつけるときに、浜松の洋品店、高町のあたりにあった洋品店と聞いているんですけども、段ボール箱の中に入って売ってた子ども用のTシャツを買ってきたんですね。10枚束になって300円、1枚たった30円です。このまったく同じ柄のTシャツを10枚買って東京に持ってきました。僕はその1枚30円のTシャツを、毎日とっかえひっかえ子どもたちに着せていました。これがどのようなTシャツかといいますと、胸に大きく四角く写真がプリントされている。この写真が王選手と長嶋選手のバットを振っている写真です。一体何十年洋装店の倉庫に眠っていたかというようなものをですね、うちの母さんは10枚買ってきました。上が30円のTシャツ、下は裾がほつれたような短パンです。これは僕がバザーでやっぱり30円くらいで買った短パン。うちの娘たちは上下合わせて着ているものが100円しませんでした。僕は上下合わせて着ているものが1000円しませんでした。

そんなみすぼらしい格好したお父さんが、さらにみすぼらしい格好した娘たち二人抱えて、保母さんに「今日はありがとうございました」とお礼を言って家路につく。僕が朝もっていった布オムツ、これが使用済みとなって全部汚れ物袋の中に入っているものを二つ抱えて、みすぼらしい格好した娘を二人抱えて、商店街を抜けて家に帰ろうとして歩いていくと、八百屋さんがある。八百屋さんに入って、夕ご飯の材料に野菜でも買おうかと思って入っていって、奥に向かって、「ごめんくださーい」と声かけると、八百屋さんのおばさんが出てきて、僕たち親子三人の顔をずっとこうみながら、僕の方にとととととって歩いてきて、僕の肩をぽんて叩いて、「お父さん、生きてればいいことあるから」となぐさめてくれるんですね。なんだ、生きてればいいことあるからってどういうことなんだろうって思ったんですけど、たぶん僕たちの格好を見て、妻に逃げられ、子育てだけを押し付けられた哀れなお父さんと思っているに違いないなって思ったんです。その八百屋のおばさんは、「お父さん、がんばんな、今日はニンジンまけとくから」とかいって、次の日いったらネギとかサービスしてくれるようになったんですね。僕は「いや実は妻はいるんだけどなぁ」っていうことを言わないまま、それからずっと励ましてくれるようになりました。

そのとき八百屋さんが一体どのようなことを考えていたのかが、それから3、4年たったとき明らかになったんですね。その頃、もうすでに保育園を二人の娘たちは卒園してしまって、その八百屋さんにいかなくなって、2年くらいたってました。そして僕はベストセラーが出て、仕事がすごく忙しくなってきた。そんなときに、週刊文春からエッセイを頼まれたんですね。で、そのときに書いたエッセイっていうのは、こういったテーマで書きました。「お父さんが一人で子育てをしていると、世の中のおばさんたちはとっても親切にしてくれます」というテーマ。僕は東京と浜松間、新幹線往復したことが何度もあります。僕が赤ちゃんを抱えて自由席に座ってるとどこからともなくシニア世代のおばさんたちが集まってきて、すごくみんな優しくしてくれるんです。「何か困ってることない？」「かわいい赤ちゃんね」「これ食べる？」いろいろ優しくしてくれます。ところが、どんどんどんどん頭の中で疑問が大きくなっていくのもわかるんですね。「このお父さん一人で子育てやってるんだけれども、お母さんどこいっちゃったのかしら。死に別れたのかな、それとも逃げられたのかな」なんていろんな疑問がわいてくるんだけれども、気を遣って僕には直接聞くことができない。僕が降りようとすると必ず赤ちゃんに向かって、「ところであなたのお母さんどこいっちゃったの」って聞くんですね。で、聞きたいんだけど直接聞けないもどかしさみたいなものをよく感じました。この人、今もどかしいと思ってんだろうなってすごくわかる。僕がよくいっていた八百屋のおばさんも、いくたびに僕のことを、お父さんがんばんなよ、今日はこれまけとく